

くさかべしきぶけ 日下部式部家	北区
<p>日下部家の所在する小野郷は、平安時代末以降仙洞御料として木材を貢納していた杣地で、北山杉の産地である。同家は、古くは小野郷10カ村の庄屋を勤めていたと伝わり、「式部屋敷」と呼ばれていた。建物は木造平屋建、入母屋造の茅葺で、桁行6間半、梁行5間半の規模を有する。棟札より明和9年(1772)の建築と判明する。東側に土間をとり、床上部は表側(南側)にシモンデ、カミンデ、奥に囲炉裏を切ったダイドコロと、ナンド2室が整形に並ぶ。現在は妻入に東面の入口となるが、当初は南側に大戸を備え平入となり、カミンデの南には角座敷が設けられていたことが資料より分かる。小屋組はオダチ・トライ形式をとる。小野郷は北山型民家の分布域に位置し、この住宅もその発展系統に属するが、整形の間取りで平入である点や開放的な開口部など、相対的に進んだ形式がみられる。年代が18世紀後半に遡ることが資料的に判明する市内有数の古い茅葺民家であり、山村の旧家の構えを伝える重要な建物である。(京都市指定有形文化財)</p>	
	
	

たかだけ はくしんしゃ
高田家 (博真社)

北区

洋反物業・田村駒の創業者・田村駒治郎の義兄にあたり、関連会社の京都染工の社長をつとめた高田常治郎の居宅として建てられた。棟札から請負・松浦工務所、大工方・中西良吉により昭和6年（1931）に上棟したことが分かる。田村駒本社を設計した建築家・木子七郎が同家の建設に関与したことも伝わる。木造2階建、鉄筋コンクリート造地下付、桟瓦葺の建物である。東西に細長い敷地の東側に玄関を設ける。玄関を入れると中央に階段室と廊下が延び、南側には和室3室（座敷、仏間、居間）を配する。北側には2室の洋室（応接室、食堂）の奥に内玄関を設け、茶の間や台所など内向き空間を配する。2階も中央廊下の北側に洋室、南側には客間など和室を配する。アーチを用いる玄関ポーチ部分と洋室部分の外観はスタッコ仕上げの洋風外観とし、南側面など和室部分は真壁造の和風外観とする。応接室は建具を開けると食堂と連続した空間となり、大理石のマントルピースを備えた本格的な洋風意匠を用いる。和洋の居室とも上質な空間となっている。昭和初期における大規模で上質な郊外住宅として重要である。

（景観重要建造物）



大正7年に小山村は京都市上京区に編入された。小山花ノ木地区は、大正14年（1918）に土地区画整理事業が施行された地区である。鷺田家は、昭和10年（1935）に呉服関係を生業とする井上元次郎を施主として、棟梁・川嶋佐兵衛により上棟されたことが幣串から確認される。建物は木造2階建、桟瓦葺。北側の通りに板塀と門を構え、やや奥まって玄関を設ける。奥に向かって中廊下を通し、西側にザシキ、ブツマ、東側に台所や茶の間などを配する。庭を挟んだ北側には独立棟の応接室を設け、渡り廊下でつなぐ。主屋の奥には6畳及び3畳前室からなる茶室棟が建っている。床柱に絞り丸太を用いるザシキや、玄関廻りなど、各所にスギの磨き丸太が用いられている。また応接室は洋風と数寄屋意匠を折衷した独特の意匠が見られる。主屋2階北側の外壁など、改変部分はあるものの、全体として良く保存されている。昭和初期の上質で規模の大きい和風住宅として重要である。



ゆもとけ
湯本家

上京区

相国寺の旧境内地にあたる。歴史家・湯本文彦（1843～1921）の居宅として建築された。湯本は鳥取藩士の家に生まれ、松江師範学校長などを務めた後、京都府雇となり『京都府治志』『京都府寺誌稿』などの編纂に従事した。明治28年（1895）の平安遷都千百年紀念祭に際しては、付帯事業の『平安通志』編纂事業を担当した。明治36年に同地に転居したことが記録から知られるが、現存する棟札銘からは建物が同年に上棟したことが分かる。建物は木造平屋建、桟瓦葺である。北側の玄関を入れると2室の2畳間があり、東側には床を備えた8畳間、南側には真珠庵の庭玉軒を移したと伝わる茶室が設けられている。西側には中廊下が延び、その北側には浴室や納戸、南側に4畳半間と6畳間が配される。4畳半間の床柱には淨瑠璃寺の古材と伝わる丸柱が用いられ、床廻りから離れた箇所に付書院を備えるなど特徴的な意匠を有する。湯本文彦が『平安通志』の編纂に取組んだゆかりの場であり、その建築的な好みを伝える和風住宅として重要である。



うえだつねじけ
上田恒次家

左京区

陶芸家・上田恒次（1914～1988）が、自らの設計で建てた自邸である。主屋として、昭和12年に陶房として西側の棟を建て、昭和17年頃に居住空間として東側の棟が増築された。設計に際しては、丹波地方を旅行して同地の民家意匠を参考にしたと伝えられ、豪壮な民家の意匠が用いられている。上田は河井寛次郎に弟子入りすることを欲しなかなか許されなかつたが、自邸の建築案を相談した際に弟子入りを許されたという。西側棟の外観木部にはベンガラが塗られ、和室には囲炉裏を切り作品を飾るための押板風の棚をつくるなど、独特の意匠を有する。一方、東側棟は戦時中の物資不足のため外観が墨で黒く仕上げられている。主屋の建築と同時期に築かれた登り窯の他、戦後、轆轤場を備えた長屋門や納屋が増築され、現在の屋敷構えがつくられた。民藝運動の場となった陶芸家の製作、生活の場が今に伝えられている空間として重要である。（国登録有形文化財）



おがわけ
小川家

左京区

建築家・武田五一の設計、金田組の施工により、大正11年（1922）に建築された。安田銀行の経営に携わり、早稲田大学創立に尽力した小川為治郎が、当時京都帝大の学生であった子息・睦之輔のために建てたもの。鉄筋コンクリート造2階建て、銅板葺。外壁はドイツ壁で腰を洗い出しつつある。北側に玄関を設け、玄関脇に応接室、南側に居間と食堂を配する。同時期、武田は大正後期に鉄筋コンクリート造による住宅建築を試み、青柳邸（大正11年／現存せず）、旧山口玄洞邸（大正12年）を手がけている。小川家の外観意匠は、大正末期以降に武田がしばしば用いたスパニッシュ様式に比べると簡素であり、これは鉄筋コンクリート造住宅の模索期を示すものと考えられる。数少ない現存する武田五一の住宅作品であり、初期の鉄筋コンクリート造住宅として重要である。（国登録有形文化財）



きゅうきたけ
旧喜多家

左京区

大正15年（1925）に京都帝国大学で化学の教授をつとめた喜多源逸の住宅として建築された。北隣にはヴォーリズの設計による駒井家（昭和2年建築）が建ち、北白川の住宅開発で最初期の建物であった。設計は、京大で同僚であった藤井厚二、施工は酒徳金之助である。木造2階建、桟瓦葺で西側に玄関を配し、南側に洋室、居間、サンルームを配する。畳敷きの居間は椅子座の洋室よりも床面を約35cm高くしている。玄館奥には階段室、茶の間が続く。北側には台所や風呂などの水廻りが配されていたが、現在では同部分は改築されている。南側への居間の配置、椅子座と床座との接続など、藤井の住宅設計への模索が良くあらわされた作品として重要な作品である。また、北白川の住宅開発の嚆矢となる建物としても評価される。

（国登録有形文化財）



きゅうたけべ し か いいん
旧建部歯科医院

左京区

歯科医院と住宅を併用する建物として、昭和28年(1953)に建てられた。設計者の増田友也(1914~1981)は京都大学建築学科を卒業し、同学科の教授を務めた。建築論の研究者として活躍する一方、尾道市役所、蹴上浄水場などを設計した。鉄筋コンクリート造2階建、片流れ屋根で、外壁はモルタル仕上げとする。東側に玄関を開き、医院空間を北側、居住空間を南側に配置する。1階は、南側に居間兼台所、北側を吹抜けの待合室・診療室とする。2階は、寝室、子供部屋を配する。2階室に明障子を用いるなど和風意匠を取り入れる点も注目される。ファサードは縦に3分割され、中央にガラス入り建具、北寄りにコンクリート製の縦ルーバーを並べる。延べ床面積約70m²の小規模の建築で、戦後、池邊陽の「立体最小限住宅」など空間的な豊かさを追求した狭小住宅の提案に位置付けられる。その中でも、医院を併用した鉄筋コンクリート造の作品として評価される。

(国登録有形文化財)



ほんだけ きゅうてらえけ
本田家（旧寺江家）

中京区

施主の寺江直次郎は呉服業を営み、小山に本宅、紫竹に工場を持ち、同建物は店舗として建てられた。木造2階建、桟瓦葺、間口5間、奥行15間半の敷地に表屋造の構成で建つ。建築資料が残り、大工・橋本嘉三郎による施工により、昭和10年（1935）に建築されたことが判明する。橋本は数寄屋大工として知られ、蘆花浅水荘（山元春挙邸）、霞中庵（竹内栖鳳邸）などを手がけている。表屋部分は水平に水切りのラインを入れたモルタル仕上げで、モダニズム風の外観である。1、2階とも洋室の店舗とする。その奥には平屋建の洋風応接室、2階建ての居住棟が続く。居住棟は南側に通り土間をとり、1階は中央に廊下、階段室を設け、北側に座敷と次の間を配する。2階には和室3室を設ける。主屋の奥には製品置場として使用された離れが建つ。表屋造の構成を踏襲しながら発展した店舗併用住宅であり、京都の近代化を示す都市の建築として重要である。



やべとくときいてん
家邊徳時計店

中京区

家邊徳時計店は、明治4年（1871）の創業で、当時は町家建築の屋根に時計塔を載せた店舗であった。現在の建物は、明治23年（1890）に建築された建物である。建築当時は3階建てで、時計塔が載っていたが、戦後老朽化のため3階以上の部分が撤去され、現在は2階建てとなっている。煉瓦造の店舗の奥には木造2階建ての居住棟があり、全体として表屋造町家の構成をとっている。店舗棟は赤煉瓦の壁体を外観にあらわし、花崗岩でコーナーストーンを施している。1階上部には3連アーチを設けるが、受ける柱が無いなど西洋建築としては不自然な意匠である。1階内部は正面奥に階段を配して、右手に金庫室を設けている。金庫室の扉には、明治の画家・田村宗立（1846～1918）による油彩画が残り美術史的にも貴重である。明治20年代の煉瓦造による商業建築は全国的にも現存事例が極めて稀で、京都の近代化の過程を伝える上でも重要な建物である。（国登録有形文化財）



今村家住宅は本町通の西側に建ち、主屋は間口 6 間半、奥行 6 間の規模を有する。北棟及び南棟部分に分かれる。北棟部分は通り土間の北側に 1 列に 3 室（ゲンカン、ダイドコ、ザシキ）を配する。南棟部分は表側に物置を配し、奥は北棟部分と合わせて広い土間となる。北棟はつし 2 階を設け、むしこ窓の外観としている。主屋の普請については一連の文書が残る。そのうち宝暦 12 年（1762）の普請願と平面が一致し、部材の経年状態とも齟齬がないため、同年頃の建築と考えられる。ザシキには床と棚が備えられているが、昭和 6 年の改修で設けられたものと判明している。主屋の奥には納屋 2 棟、離れが建っている。普請文書から建築年代やその後の変遷が判明し、京都市内の町家としては最古級とも言える 18 世紀半ばに遡る遺構であることが分かる重要な町家建築である。



きゅうむらいぎんこうしちじょうしてん
旧村井銀行七条支店

下京区

旧村井銀行七条支店として、大正2年（1913）に建築された。設計は吉武長一、施工は清水満之助（清水組）である。煉瓦造2階建、鉄板葺で、パラペットによって切妻造屋根を隠している。七条通に面する南側に主たる入口を設ける。当初、1階の南・西面にL字型にカウンターを設け、東側に営業室としていた。南側は吹き抜けとしていた。北東部分には金庫室が設けられ、現存している。2階には応接室2室などを配していた。昭和39年頃に吹き抜け部分に床を張り、間仕切りを撤去している。ファサードには、本格的なドリス式のジャイアントオーダーを4本並べる。大正期の数少ない煉瓦造による銀行建築として重要であるとともに、京都駅の開設により繁栄した頃の七条通の面影を伝える建物としても評価できる。



すざくぶんきちょう まちや
朱雀分木町の町家

下京区

朱雀分木町の町家は、昭和8年（1933）に建築されたとされる木造2階建、桟瓦葺の建物である。区画整理によって隅切りされた敷地に対応して1階表側の洋風応接室は五角形となり、また、外観もタイル風鉄板張りや出格子状部分を洋風に仕上げるなど特徴的である。一方、玄関を入ると通り土間が延び、1列に3室を配し、階段も押入内に設けるなど伝統的な町家型の平面が踏襲されている。1階奥は8畳座敷で、床、棚、仏間を並べ、床柱にはツツジの変木を用いる。2階の8畳座敷もビンロウジュの床柱を用い、近江八景風の彫刻欄間を嵌めるなど意匠的に上質である。主屋の奥には離れが建つ。昭和初期における周辺部の近代和風住宅で、町家の系譜を踏襲しつつ近代化が図られた事例として重要な建物である。



ろくそんのとうじんじゃ
六孫王神社

南区

六孫王神社は、応和元年(961)に清和源氏の祖源経基が死去した後、嫡男満仲が経基邸宅跡に靈廟を建てたことに始まると伝える。その後、この北に遍照心院大通寺が建立されてからは、その鎮守社となつた。中世には衰退していたが、元禄14年(1701)に江戸幕府の費用で再興されたのが現在の社殿である。本殿、拝殿、唐門、廻廊の他、摂社の多田社と五座社が残る。本殿は桁行3間、梁行2間、切妻造・平入で、その前方に桁行5間、梁行3間、入母屋造・平入の拝殿が建ち、両殿が造合で連結された複合社殿の形式をとる。唐門は拝殿の前方に建つ四脚門で、屋根は前後に唐破風を付け、側面は入母屋造とする。いずれの屋根も現在は銅板葺であるが、元は本殿が桧皮葺、拝殿と唐門が栩葺であった。唐門の北と南には本瓦葺の回廊が接続する。同社は類例の少ない切妻造本殿であり、拝殿と造合で結ばれた複合社殿となる点が特徴的である。同時期に造営された唐門、回廊、摂社が残り、江戸時代中期の境内景観をよく伝えるものとして重要である。（京都市指定有形文化財、景観重要建造物）



おおはらのじんじゃ
大原野神社

西京区

大原野神社は、延暦3年(784)の長岡京遷都の際、藤原氏の氏神として奈良の春日大社を勧請したのが始まりとされる。祭神は春日神4柱で、平安遷都以降、都における藤原氏の氏神として信仰を集めた。中世末には一時衰微するが、近世に後水尾天皇により再興された。本殿は、一間社春日造社殿が4棟並び、板塀で連結される。擬宝珠銘から文政5年(1822)頃の再建と考えられる。屋根は檜皮葺で、棟に置千木と堅魚木3本をのせる。本殿南には一間薬医門形式の中門、その両脇に東廊と西廊が建つ。いずれも切妻造、檜皮葺で、本殿と同時期の建築。摂社若宮社は元禄14年(1701)まで遡る春日造社殿である。境内の鯉沢の池は奈良の猿沢池を模したとされる。奈良より勧請した春日社の境内景観をよく伝えるものとして重要である。(京都市指定有形文化財)

